

## 研究論文 賢治童話における本生譚

|          |   |
|----------|---|
| 著者       | 牧野 静  |
| 著者別名     | MAKINO Shizuka  |
| 雑誌名      | 求真  |
| 巻        | 22  |
| ページ      | 25-36   |
| 発行年      | 2017-03   |
| その他のタイトル | Articles Jataka Tales in Kenji's Literary Works                                       |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00146587">http://hdl.handle.net/2241/00146587</a> |

# 賢治童話における本生譚

## 序

宮沢賢治（一八九六～一九三三）を文学者の枠にとどまらないものとして評価しようという動きがある。近年では二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災以降、その思想に再注目しようとする試みが島蘭進<sup>①</sup>や山折哲雄<sup>②</sup>によって行われている。賢治は「雨二モマケズ」等にあらわされているように近隣農民の暮らしぶりに心を痛め、東北の過酷な農村の環境を改善する為に私塾である羅須地人協会<sup>③</sup>を設立する等の行動をとっている。このような姿勢を、過酷な環境にある被災者を励ますものとして、また被災地以外の人々へも尽力を呼び掛けうるものとして評価したことが主な注目の理由である。しかし賢治が現代に至るまで高く評価されているのはその創作のゆえであり、行動実践者としての側面はそれに付随して語

り継がれているものである。換言するならば賢治の他者への祈りがもつとも実を結んでいるのはその創作上である。そして賢治が他者の為に尽力したその根本には、信仰の問題がある。

## 牧野静

本稿では賢治の思想を明らかにする為に、賢治が創作を通じて信仰に基づいた理想をあらわそうとした過程を検証する。その為、賢治の作品のうち本生譚 (yabaka<sup>④</sup>)、その中でも特に捨身供養を行うものに影響を受けたと思われる創作に注目する。賢治は最初期に描いた『旅人のはなし』から（一九一七年）に始まり、没する前年である一九三三年に発表した『グスコープドリの伝記』に至るまで、繰り返し他者の命を救う為に命を落とす主人公の物語を構想している。これが賢治の終生のテーマであったことは疑いようがなく、そしてその着想のもととなっているのが本生譚である可能性が高いのである。

考察にあたっては、作品分析を中心に、賢治の触れた、或いは触れた可能性のある経典等との比較を行い、また書簡等を用いて伝記的事実の確認を適宜行うという手法をとる。

## 一、信仰と創作

考察に入る前に、賢治が信仰と不可分なかたちで創作を志向するに至った軌跡を明らかにする為、賢治が生家の浄土真宗の濃密な信仰の中に育ったのち、日蓮主義を掲げる国柱会入会に至る経緯を追う。

宮沢賢治は一八九六年、岩手県稗貫郡里川口村（現花巻市）で生を受けた。賢治の生家である宮沢家は浄土真宗の篤信であり、特に父政次郎は暁鳥敏等の真宗教学者を岩手に招き、仏教講習会を開催する程熱心な門徒であった。そのような生育環境はそのまま初期の信仰の形成の源である。賢治が初めて法華経に触れるのは一九一四年九月頃であるが、これも父政次郎の法友である高橋勘太郎から送られてきたものである。このとき島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華経』を読んだ賢治は「異常な」感動を受けたとされている〔十六（下）・九〇頁〕。

そして賢治は一九二〇年に国柱会に入会、翌一九二二年には突如

出奔・上京し鶯谷の国柱会館を訪ねている。法華経に感動したこと  
が改宗への端緒だが、家出を伴うほどのフアナティックな傾倒の理由を賢治は明らかにしていない。本稿では紙幅の都合上、近隣の貧しい農民を搾取することによって成り立つ宮沢家の質屋という家業に嫌悪感を持ち〔十五・一八〇〕、家業で財を成しながら浄土真宗の篤信であり続けた父政次郎への反発<sup>6)</sup>、また念仏という易行を掲げる浄土真宗に批判的な視線を持ち<sup>6)</sup>、低費医療院を設立する等の社会事業を実践する国柱会を高く評価した可能性<sup>7)</sup>を挙げるに留めるが、もう一点看過できないのが賢治の創作を好む気質である。賢治は一九二一年、盛岡中学三年生の頃から短歌の創作を開始し〔十六（下）・六八〕、また一九一八年頃には『蜘蛛となめくちと狸』と『双子の星』という二つの自作の童話を弟清六に語り聞かせている〔十六（下）・二六一〕。賢治は早くから旺盛な創作意欲を持ち合わせている。そして国柱会主催の田中智字は「世間救済」の為に法華経を広めることを志向し、その為の方便として芸術を利用する教化芸術を強く打ち出している<sup>8)</sup>。実際に智字自身非常に文才に長け、数多くの戯曲の台本を執筆する<sup>9)</sup>等の創作活動を行っている。賢治は熱烈に智字を信奉するようになり、一九二〇年二月二日付の友人保阪嘉内宛書簡等にそれを表明している。その一部を以下に引用する。

今度私は

国柱会信仰部に入会致しました。即ち最早私の身命は

日蓮聖人の御物です。従つて今や私は

田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。(後略)

〔十五・一九五〕

賢治は日蓮と田中智学を同一視するかのような熱烈な信奉を捧げている。一九二二年に国柱会館を訪ね幹部の高知尾智燿との面談した際にも智学の言葉として信仰を創作にあらわす助言を受けており<sup>(9)</sup>、「高知尾師ノ奨メニヨリノ法華文字ノ創作」〔十三・五六三〕というメモを遺している。以降賢治は猛烈な勢いで執筆を行つていく為、教化芸術を創作と信仰を結びつけて後押しするものと捉えたことがその傾倒の理由であることは十二分に推察される。

しかし晩年の賢治は教化芸術を否定している。たとえば一九三一年頃に使用していた手帳では国柱会独自の修行法を引用しつつ<sup>(10)</sup>「断シテ教化ノ考タルベカラズ」〔十三・五六五〕と書き残している。賢治はここで教化芸術を否定すると同時に、執筆を信仰の純粹なあらわれとして行つた決意を述べている。

賢治にとって教化を志向しない純粹な信仰のあらわれとしての

創作とは何だったのだろうか。結論を先取りする形になるが、賢治が田中智学『本化聖典大辭林』において述べている「不惜身命」に影響を受けていた可能性が既に指摘されている<sup>(12)</sup>。以下にその項を引用する。

「聖惠問答鈔」に出づ。「法華経」譬喩品の偈の文。法の為に身命を惜しまずといふこと。凡夫の至極の信仰にして、いはゆる命にまさるものなければ、之を供養するは戀法の至なれば也。法華経の信とは是れ也。「法華経」提婆達多品の『不惜身命』、勸持品の『我不愛身命但惜無上道』如来寿量品の『一心欲見佛不自惜命』の諸文と今の文とは法華経の行者の眼目也。『不惜身命』に事と理との別あること「御義口傳」勸持品十三箇の大事の第二に示されてあり。<sup>(13)</sup>

智学はここで法華信仰の神髓を捨身供養であるとしている。賢治は創作を通じて捨身供養を念頭に置いた上で主人公を造型することで、自身の信仰をあらわそうとしていくのである。次節以降ではその初期の創作から順に自己犠牲を行う主人公の造型を分析することで、賢治があらわそうとしたものを探る。

## 二、本生譚にまつわる初期の創作

今節では実際に賢治が経典から影響を受けて構想したと思われる創作のうち、特に本生譚にまつわるものを、触れていた、或いは触れていた可能性のある経典との比較検討を通じ、考察をすすめていく。

賢治の創作の最初期のものに『旅人のはなし』から「十二・二三五〜三三八」という短編がある。これは一九一七年に盛岡高等農林学校の学友らと創刊した同人誌『アザリア』に発表したものである。この物語は転生を繰り返しながら旅を続けた旅人が「総てが楽しみ総てが悦び総てが真であり善である国」に辿り着いたとき、旅人の正体がこの国を作った王の王子であり、「王様は此の王子の為にこの国を作りました」と明かされるものである。この展開が法華経の「信解品<sup>14)</sup>」における長者窮子の譬喩と類似することが既に指摘されている<sup>15)</sup>。これは長者の家の子が出奔・流転ののちにそれと知らず父である長者の家ではたらくようになり、長者の臨終の際に親子であることと遺産の相続を告げられるというたとえによって、如来は衆生を段階に応じて導くことを比喩的に説いたものである。賢治による流浪する旅人とその父王という造型は確かにこれに類似しており、法華経を念頭に置いた創作であることがうかがえる。

作中には旅人の転生の理由として「ひどい王様の国へ行つては、王様の詩を朗読しなざるときに菓子を喰べてみた云ふ罪で、火あぶりになる筈の子供の代りになって死んだり致しました」という部分があり、これが自分の身を犠牲にして他を生かすという点で本生譚における捨身供養を意識した描写であるように見受けられる。ではこの作品を構想した一九一七年の時点で賢治が触れることの出た経典にはどのようなものがあるだろうか。

賢治が所持していたことが明らかにされているのが、一九一四年に父から譲り受けた島地大等編著『漢和对象妙法蓮華経』である。またここから派生して、賢治が聖徳太子を尊崇していたことも考慮に入れることができる。『漢和对象妙法蓮華経』はその冒頭に「聖徳皇太子御贊<sup>16)</sup>」がおかれているのみならず、編者である島地大等による「法華大意<sup>17)</sup>」には「日本民族と日本佛教と聖徳皇太子とは日本に於ける三位一体である」という強調が置かれている。賢治は聖徳太子へも尊崇の念を抱き、のち一九二一年に出奔した際に法隆寺を訪ねる等している<sup>18)</sup>。法隆寺の玉虫厨子における「捨身飼虎図」(如来が過去生で薩埵太子であった時に飢えた虎の親子に自らの肉を与える為投身自殺を遂げるもの、『金光明経』による)や「施身聞偈図」(雪山童子が羅刹から肉を与えることを条件に真理を聞き、約束を果たす為に投身した際に羅刹が本来の帝釈天の姿となり

それを救うもの、『大涅槃経』による)に興味を持った可能性は十分に指摘できる。

賢治が具体的にどの經典に何を通じて触れていたかは、賢治が読書録を遺していないことや没後その蔵書が焼失する等の事情により、ある程度は推測の域を出ない試みであるが、少なくとも捨身飼虎にかんしては自身の命を投げ打つことで他の命を繋ぐという点で旅人の造形と共通項を見出すことが出来る。

身を焼くという着想は別のもの、すなわち法華経における「薬王菩薩本事品第二十三(9)」に由来する可能性がある。これは薬王菩薩が過去生において法華経への帰依のゆえに焼身供養を遂げたことを説いたものである。これは過去生における焼身という点で旅人と共通する。しかし子供を助けるという旅人の目的はこれと異なる為、完全な符合とは言い難い。

本稿ではこれに加え、賢治が触れていた可能性があるものとして、一九〇一年に発行された『国史大系第拾六卷』に収録されている『今昔物語』巻五を挙げる。賢治は東北の寒村の生まれであり、また在家者であったため、触れることが可能な經典の類は限られている。しかし『国史大系』ならば公の図書館や学校等、賢治の行動範囲内でこれに触れる機会が十二分にあつたと推測できる為である。これに収録されている『今昔物語』の巻五には本生譚が多く、このうち

の「三獸行菩薩道鬼焼身語第十三<sup>(10)</sup>」は、鬼が老翁を養う為に自身の肉を与えようと焚き火に飛び込むというものである。老翁の正体は帝釈天であり、これを見届けてその菩薩行を認め、鬼の焼身の姿を月へとうつしたという。焼身によつて相手の生を繋ぐという共通項を見出せる為、先に挙げた「捨身飼虎」や「薬王菩薩本事品第二十三」よりは旅人の造形に近いといえる。しかしそれでも、旅人が命を落とした理由が「ひどい王様」の命令の身代わりであり、他の生き物を飢えから救うことを理由としない点で完全には符合しない。

賢治はこれ以降も捨身と転生を念頭に置いたであろう創作を続けていく。そしてそれが、他の生き物を飢えから救うのではなく、ある種の理不尽を受容するかたちで描写されることも受け継がれていくのである。たとえば一九二二年に執筆された『よだかの星』「八・八三〜八九」は、よだかが星への転生を果たすことから先述の「薬王菩薩本事品第二十三」との関連が指摘されている作品である。しかしよだかが死をもいとわずに星空への飛翔を願うそもそのの契機は、鷹から改名か死のどちらかを選ぼう脅迫されたことである。よだかか鷹の要求を、殺される前に自死を選ぶというかたちで受け入れたともいえる。

また一九二二年に執筆された『二十六夜』「九・一五〜一七二

は、直接的に「捨身」「施身」等の語句を鏤めたものだが、主人公である鼻の子供穂吉が人間の子供に殺される物語である。

タイトルの『二十六夜』の由来は集会の風習に仏教信仰が合わさった「二十六夜講」であり<sup>2)</sup>、非常に仏教色の強い作品である。この作品は「梟鴉守護章」という架空の経典の講釈を鼻たちが寄り集まって三夜連続で聴講するのと並行し、穂吉の事件が起きるといふ筋書きである。「梟鴉守護章」とは作中オリジナルの経典であり、自らの肉を投身自殺によって飢えた人間の親子に与えた功德によって菩薩となった雀、「疾翔大力」について述べている。この疾翔大力は「施身大菩薩」とも「捨身菩薩」とも呼ばれ、投身によって肉を与える造型は捨身飼虎を彷彿とさせるものである。鼻たちは人間へ復讐しようとするが、この講釈を聞かされたことよって思い留まる。また穂吉はこの講釈を聞きながら、「かすかにわらったまゝ」絶命する。「梟鴉守護章」はまた法華経における「如来寿量品第十六」の冒頭部と語句の類似が多いことから、これを念頭に置いていたことも推測される<sup>2)</sup>。

『旅人のはなし』から『よだかの星』『二十六夜』の三作品に共通するのは、法華経の影響のもと捨身を念頭に置きつつも、主人公が死に至る理由を圧倒的に立場の強いものから強いられる理不尽として描いていることである。捨身飼虎等は、命を繋ぐ為肉

食が必要な生き物の為に過去生の如来が自らの肉体を食物として与えるものである。しかし賢治が描く主人公たちはそれぞれ「ひどい王様」や「鷹」や「人間の子供」からごく必然性のない理由で死を要求され、それを甘受している。これらのうちもつとも明確に捨身供養を打ち出している『二十六夜』に至っても、法の為に命を落とすという筋書きを意識しつつも、穂吉に訪れる死は「ごく理不尽なものである。これらの主人公が死に至る理由は、捨身を意識しつつもどちらかと言えば殺生戒を念頭においた罪業意識と密接である可能性が高い。よだかは甲虫等の虫を食べて生きており、作中それを忌避しようと苦しむ描写がある。また「梟鴉守護章」も、鼻を他の生き物を食べるという「諸の悪業」を成すものと定義している。よだかや穂吉は畢竟その罪深さの故に理不尽な死を甘受させられているのである。

賢治の本生譚における捨身にまつわる創作は、一九二三年以降に変化があらわれる。次節では賢治にとって創作の転機となつたであろう妹トシの死と、それ以降の創作を考察する。

### 三、宮沢トシの死

賢治の本生譚における捨身に影響を受けたと思われる創作は、一

九二三年以降大きくその構造を転換する。それを明らかにする為  
まず賢治が創作を転換する契機となった一九二二年の妹宮沢トシ  
(一八九八〜一九二二)の死とそれにまつわる創作を概観し、次に  
一九二三年に発表した「手紙二」という作品を考察する。

トシは岩手県立花巻高等学校を首席で卒業したのち東京の日  
本女子大学に進学した才媛であつた。また家業を継がない決意や改  
宗問題で父政次郎と烈しく対立する賢治に、宮沢家の中で唯一理解  
を示していたことが複数の書簡から明らかにされている<sup>(23)</sup>。賢治に  
とつてトシは「信仰をひとつにするたつたひとりの道つれ」「二・  
一四三」であり、そのトシが二四歳の若さで病没した衝撃は賢治の  
創作に決定的な影響を及ぼしていく。

トシの死にまつわる創作は、トシ臨終の日付である(一九二二  
一・二七)を附した「永訣の朝」に始まるが、ここで賢治はトシ  
が末期に食べた雪が「兜率の天の食」(二・三五六)となることを  
祈るといふ表現でトシの追善を行う。しかし賢治は「永訣の朝」と  
同じ日付を附し、ともに『春と修羅 第一集』に収録した「無声働  
哭」においては以下のように記述する。

ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ

また純粹やちいさな徳性のかずをうしなひ

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてるとき

おまへは自分にさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて

毒草や蛍光菌のくらい野原をただよぶとき

おまへはひとりどこへ行かうとするのだ「二・一四三」

賢治はここで信仰不安に陥っていること、及びトシの死後の行方  
が天上である確信が持てない苦悩を表白している。賢治は一九一八  
年に友人保阪嘉内が母親を亡くした際、『日蓮上人御遺文』中の「上  
野尼御前御返事<sup>(24)</sup>」や<sup>(25)</sup>、「法蓮鈔<sup>(26)</sup>」の記述<sup>(27)</sup>に基づいて法華経に  
基づいた肉親による死者の追善を勧めており「十五・九一」、また  
一九二二年から一九二三年にかけて執筆した『ひかりの素足』「八・  
二八一〜三〇四」という童話においてもこれを主題としている。し  
かし賢治自身がトシを喪った際、その悲しみはあまりにも痛烈であ  
り、賢治は追善を成功させることが出来ない。賢治はトシの行方が  
天上である確信が持てないことに苦悩し、その理由を自身の信仰が  
未だ十全でないことに見出していく。その過程がトシの死にまつわ  
る創作にあらわされているのである。



賢治はトシの死の翌年である一九三三年の二月に、手紙風にしたためた童話を近隣の家々に無記名で投函して歩くという行動に出る。このうちの通称「手紙四」は、妹ポーセと死別した少年チュンセに向けて言葉を紡ぐものであり、チュンセが賢治を、ポーセがトシをモデルにしたと思われる作品である。以下にその台詞の一部を引用する。

チュンセはポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなこどもでも、また、はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で華果をたべてゐるひとでも、また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがひのきやうだいなのだから。チュンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルムプフンダリカサストラといふものである。チュンセがもし勇気のあるほんたうの男の子ならなせまつしぐらにそれに向つて進まないか。【十二・三三〇～三三二】

ここでいう「ナムサダルムプフンダリカサストラ」とは、賢治

が南無妙法蓮華経をサンスクリットに訳そうと試みたものである。それを踏まえるとこの「手紙四」は、肉親の死について悩み苦しむのであれば、法華経に基づいて「すべてのいきもののほんたうの幸福」をさがさなければならないという見解を述べていることになる。トシの死に際して信仰不安に陥つた賢治は、法華経への帰依に基づいて「すべてのいきもののほんたうの幸福」を希求することでそれを乗り越えようとしたのである。

そしてこの「手紙四」と同時期に配布した「手紙二」【十二・三二一～三二四】は、明らかに本生譚に着想を得ているものである。これはあるとき竜がよい心をおこして他の生きものを殺さない誓いを立て、自身の皮を剥ぐ獵師に対して無抵抗を貫き、またむき出しになった肉を虫に食べさせて死んだのち、天上に生まれ変わって「お釈迦さま」となったことが述べられる。竜の肉を食べた虫もこの釈迦となった竜によつてのちに「まことの道」に入った、という筋書きを持つ。先行研究において未だ出典が特定されていないこの作品であるが、発表者は『今昔物語』巻五における「五人切大魚肉食語第二十九」の項がこれに類似していることを指摘したい。以下にそれを引用する。

五人切二大魚肉一 食語第二十九。

今昔。天竺二ノ海邊ノ濱二大キナル魚寄タリケリ。其時二山人ノ行通ス一・五人有リケリ。此大魚ヲ見テ寄テ。魚ノ肉ヲ切取リテ五人シテ食テケリ。其ヲ始メトシテ世ノ人皆聞繼テ來テ。此魚ノ肉ヲ切取テ食テケリ。其魚ト云ハ今ノ釋迦二ニ在マス一。大魚ノ身ト成テ山人ノ道行カムニ我肉ヲ與ヘムト也。今ノ佛ト成給テ後。先其魚ノ肉ヲ切取テ食セシ五人ヲ先ニ教化シテ道ヲ成給フ也ケリ。所謂其五人ト云ハ。狗隣比丘。馬勝比丘。摩訶男・十力迦葉。狗利太子此等也トナム。語り傳ヘタルトヤ。<sup>(28)</sup>

これは天竺二のほとりにいた大魚を世人が皆食べるが、この大きな魚は釈迦佛が自らの肉を与えにきたものであったという筋書きである。釈迦佛となつてのち最初に教化したのがこの肉を切り取つたはじめの五人であったことが述べられている。大魚と竜は形状が近いこと、肉を与えたのち釈迦として生まれ変わること、その肉を食したものを教化することを共通項としてあげられる為、これが出典である可能性は高い。

賢治が一九二二年以前に本生譚に着想を得ながら造型したと思われる創作の主人公は、『旅人のはなし』から』をのぞいて、他の

命を繋ぐ為でなく、自らが殺生戒を犯している報いとして、強いられる理不尽を甘受して命を落とすものであった。しかしこの「手紙一」において初めて、如来が過去生において捨身によつて他の命をつなぐ筋書きのものを構想しているのである。

賢治がこれをあらわしたのが、トシの死を経て「すべてのいきものほんたうの幸福」を希求すると決意した時期であつたことは、賢治が本生譚における捨身にまつわる創作をあらためた動機もそこにあつたことを推察させるものである。信仰をより確かなものにする決意をした賢治は、自身が經典として触れていたものに対する理解をいまいちど更新しようとしたのではなかつたか。そして「すべてのいきものほんたうの幸福」を希求すること、捨身によつて他の命をつなぐことを重ね、それを同時に配布したのである。そしてそれらが重ねられた創作は、一九二三年以降にも行われていくのである。

## 結

一九二三年に「手紙一」から「手紙四」を配布してのちも賢治は創作を続けていく。ここではその中でも一九二四年から一九三二年にかけて執筆した『銀河鉄道の夜』と、一九三二年に発表した『グ

スコープドリの伝記』とを扱うことで、賢治の本生譚に影響を受けた創作の帰着点を明らかにする。

『銀河鉄道の夜』〔十一・一二三―一七二〕は他者の命を救う為に命を落とした死者との交流を通じ、主人公ジョバンニが「みんなのほんたうのさいはい」を希求する決意に至るといふ筋書きの物語である。ジョバンニの友人カムパネルラは溺れる級友を助ける為に溺死しており、また銀河鉄道で同乗する家庭教師の青年とその教え子の姉弟は沈みゆく客船の救命ボートを他の乗客に譲った為に溺死している。またこの姉によって語られる挿話に「蠍の火」がある。私たちの捕食から逃げる際に井戸に落ちた蠍が、溺れて絶命する際に「どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったらう。(中略) こんなにむなしく命を捨てずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい」と祈ったことから、「まっ赤なうつくしい火になって燃えてよるの闇を照らしてゐる」星へと転生を果たすというものである。「蠍の火」については工藤哲夫が『日蓮上人御遺文』における「身延山御書」<sup>(29)</sup>における薬王菩薩の焼身供養への言及と、師子の補食から逃れようとして枯井戸に落ちた際、師子に身を与えなかったことを悔やむ狐を帝釈天が見出すという挿話がみられることを挙げ、これらをもとに構想した可能性を指摘している<sup>(30)</sup>。

『銀河鉄道の夜』に登場する死者の造型、またその死者によって語られる「蠍の火」の挿話が示すのは、賢治が「みんなのほんたうのさいはい」に至りうる契機として自己犠牲による死を位置づけようと志向していることである。

また没する前年である一九三二年に発表した『グスコープドリの伝記』〔十一・一九九―二一九〕は、冷害による飢饉を回避する為に火山を爆発させることで天候を制御する立案をし、その計画の遂行の為にひとり火山に残って命を落とす主人公ブドリの一生を描いたものである。ブドリの性格を考慮する際に、賢治が信奉する田中智字が「法華経の信とは是れ也り」として重視していた「不惜身命」、つまり法の為に命を惜しまないことを着想のもとにした可能性が指摘されている<sup>(31)</sup>。賢治にとつて法華経とはそれを受持することが「みんなのほんたうのさいはい」に繋がるものであり、またそれを信じていることが智字によつて「不惜身命」であると定義されていることから、自己犠牲による死を選ぶ主人公によつて皆の幸福、この場合は飢饉の回避が達成されるという物語を構想したのである<sup>(32)</sup>。

賢治はその創作の最初期から經典を意識して創作を行っていたが、それがより正確な理解に基づくようになったのは妹トシの死を契機に信仰を深める決意をしてのちのことである。そしてそれ以降

の創作は、最初期から創作で繰り返し扱おうと試みていた、何かの犠牲となって死を選ぶ主人公の造型を、賢治が法華信仰と等しく捉えていた「みんなのほんたうのさいはい」を実現するためのものとして捉え直したと考えられるのである。

賢治の実生活は実践においては実りの少ないものである<sup>(32)</sup>。父政次郎や親友坂坂嘉内の国柱会入会は生涯かなわず、羅須地人協会も社会主義運動との関係を疑われた為に二年に満たず解散に追い込まれている。しかし賢治自身の祈りの言葉によって紡がれる作品世界は、祈ることが顕現せしめることそのままであるかのように構築される。そうして生み出された作品世界は賢治にとつての理想郷の性格を持つ。賢治にとつて信仰と同義であった「みんなのほんたうのさいはい」が、日常的には捉えられない次元で初めて実を結ぶことに望みを繋ぐ「営み」こそが、彼にとつての創作であつたといえるのである。

※本稿における賢治のテキストは『【新】校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、一九九六年〜二〇〇九年）に依る。「巻数・頁数」の順に表記する。

## 註

（まきの しずか 筑波大学大学院）

- (1) 島園進『日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ』朝日新聞出版社、二〇二二年、三頁。
- (2) 山折哲雄（二〇二二年）、宮川匡司編『震災後のことば 8・15からまなざし』日本経済新聞出版社、二〇二二年、一三五〜一四〇頁。
- (3) 一九二六年に設置。この名称で活動したのは一九二七年八月から翌年三月迄であるが、その後も臨終の前日である一九三三年九月二〇日迄病身をおして近隣農民の肥料相談に乗っている。
- (4) 仏教ではふつうは「この世に生まれてくるより前の生涯の物語」の意で用いられ、特には仏陀釈尊の前生物語の場合に用いられる。日本には平安期に漢訳で伝えられる。のち一二世紀初頭に成立した『今昔物語』巻五に多く収録され、鎌倉期以降の日本文学に大きな影響を与える。
- (5) 青江舜二郎『宮沢賢治』講談社、一九七四年、三一頁。
- (6) 梅原猛『宮沢賢治童話の世界 賢治の宇宙』佼成出版社、一九八四年、三二頁。

- (7) 上田哲『宮沢賢治 その理想世界への道程』、明治書院、一九八八年、二〇〇～二〇三頁。
- (8) 田中智学講述『本化妙宗式目講義録』、師子王文庫、一九二〇年、六八～六九頁。なお改題後復刊された『日蓮主義教学大観』(真世界社、一九九三年)参照。
- (9) 上田(一九八八)、九五～九七頁。
- (10) 高知尾智耀「宮沢賢治の思い出」『真世界』、真世界社、一九六七年、二八～二九頁。
- (11) 森山一『宮沢賢治の詩と宗教』、真世界社、一九七八年、一五五頁。
- (12) 工藤哲夫『賢治考証』、和泉書院、二〇一〇年、一七四～一七八頁。
- (13) 田中智学監修『普及版 本化聖典大辭林 下巻』、国書刊行会、一九二一年、二七六一頁。
- (14) 島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』、明治書院、一九一四年、一四五～一七五頁。
- (15) 多田幸正『賢治童話の方法』(転化)と独創』、勉誠社、一九九六年、四三～四五頁。
- (16) 島地(一九一四)、一～二頁。
- (17) 同右、一九～二〇頁。
- (18) 工藤哲夫『賢治論考』、和泉書院、一九九五年、八四～八五頁。
- (19) 島地(一九一四)、一四五～一七五頁。
- (20) 田口卯吉編『国史大系』、経済新聞社、一九〇一年、二五一～二五三頁。
- (21) 田口昭典『賢治童話の生と死』、洋々社、一九八七年、八四～八七頁。
- (22) 田口昭典(一九八七)、八九～九一頁。
- (23) 青木生子「近代史を拓いた女性たち」日本女子大学に学んだ人たち』講談社、一九九〇年、一九二頁。
- (24) 加藤文雄編『日蓮上人御遺文』、師子王文庫、一九二〇年、二九七五～二〇七八頁。
- (25) 鈴木健司『宮沢賢治 幻想空間の構造』、蒼丘書林、一九九四年、七〇～七三頁。
- (26) 加藤(一九二〇)、一一四八頁。
- (27) 同右、二八～三三頁。
- (28) 田口卯吉(一九〇二)、二八一～二八二頁。
- (29) 加藤(一九二〇)、一三〇〇～一三〇二頁。
- (30) 工藤(二〇一〇)、二七四～二八一頁。
- (31) 工藤(二〇一〇)、一七四～一七八頁。
- (32) 佐藤郁之「宮沢賢治における虚構と「現実」」『哲字・思想論叢』三三三号、筑波大学哲字・思想学大会、二〇一五年、二六頁。